



公益社団法人 日本作曲家協会 会報

No.202

<http://www.jacompa.or.jp>

JAPAN COMPOSER'S ASSOCIATION

ソングコンテストグランプリ・2020

グランプリ曲決定!

日本作曲家協会・日本作詩家協会共同企画「ソングコンテストグランプリ・2020」は、今年も作詩部門・作曲部門とも広く全国に作品を募集した。山川 豊さん(ユニバーサルミュージック)を対象歌手として、1月15日から詩の募集を開始したところ全国から1,733作品の応募があった。

そして3月26日、日本作詩家協会・日本作曲家協会合同のソングコンテスト委員会による選考の結果、「エレジー～終恋歌～」(作詩・成瀬友元)、「男の昭和挽歌」(作詩・外山尚子)の2作品が最優秀作詩賞に決定。

この2編の詩を課題詩として4月15日より当協会会員のみならず広く一般からも作曲募集を行った。「エレジー～終恋歌～」会員・183作品、一般・118作品。「男の昭和挽歌」会員・175作品、一般・124作品、合計600作品の応募があった。

6月29・30の両日、当協会会議室において、笹森文彦(日刊スポーツ)、清水 満(産経新聞)、田家秀樹(音楽評論家)の3氏に審査員を依頼。「エレジー～終恋歌～」会員6作品、一般5作品。「男の昭和挽歌」会員6作品、一般5作品を選び、最終選考は長良プロダクションとユニバーサルミュージック制作スタッフにより行われた。

その結果、最優秀作曲賞は「エレジー～終恋歌～」 「男の昭和挽歌」の2曲とも作曲家協会会員・玉田剛士氏が獲得した。

そして、長良プロダクション及びユニバーサルミュージックにおける編成会議の結果、「男の昭和挽歌」がメイン曲としてグランプリに決定した。

なお、このCDは9月30日、ユニバーサルミュージックより全国発売となる予定。



山川 豊

◆グランプリ

「男の昭和挽歌」 作詩：とやま ひさこ
作曲：玉田 剛士 (協会員)

◆最優秀作曲賞

「エレジー～終恋歌～」 作詩：成瀬 友元
作曲：玉田 剛士 (協会員)

◆優秀作曲賞

「エレジー～終恋歌～」 南部直登、藤田たかし、水島正和 (協会員)
林 久美 (一般からの応募)
「男の昭和挽歌」 愛田幾也、石田光輝、藤田たかし (協会員)
谷川天龍 (一般からの応募)

「日本作曲家協会音楽祭・2020」出演歌手決定

10月5日(月)北区・北とぴあ さくらホールにおいて行われる「日本作曲家協会音楽祭・2020」の出演者は下記のとおり。今回も「日本作曲家協会音楽祭・奨励賞」「日本作曲家協会音楽祭・3賞」に併せて、目覚ましい活躍で歌謡界をリードする歌手に「日本作曲家協会音楽祭・特別選奨」を授与し、ステージを飾ってもらう。

◆日本作曲家協会音楽祭・特別選奨◆



大川栄策
(日本コロムビア)



香西かおり
(ユニバーサルミュージック)

◆ベストカラオケ賞◆

「瀬戸内 小豆島」

作曲/弦 哲也・作詩/たきのえいじ



水森かおり
(徳間ジャパンコミュニケーションズ)

◆ベストパフォーマンス賞◆

「五島恋椿」

作曲/弦 哲也・作詩/さいとう大三



丘みどり
(キングレコード)

◆ロングヒット賞◆

「月枕」

作曲/都志見隆・作詩/松井五郎



竹島 宏
(テイチクエンタテインメント)

◆日本作曲家協会音楽祭・奨励賞◆



大石まどか(日本コロムビア)

「京都みれん」

作曲/幸 耕平・作詩/喜多條 忠



中澤卓也(日本クラウン)

「北のたずね人」

作曲/田尾 将実・作詩/石原 信一



おかゆ(ビクターエンタテインメント)

「愛してよ」

作曲・作詩/おかゆ



藤井香愛(徳間ジャパンコミュニケーションズ)

「その気もないくせに」

作曲/幸 耕平・作詩/千家和也



HORIKEN(ユニバーサルミュージック)

「徒花は咲いたか」

作曲/杉本真人・作詩/山口カラス

◆ソングコンテスト・グランプリ曲発表◆

「男の昭和挽歌」

作曲：玉田 剛士

作詩：とやま ひさこ

山川 豊

(ユニバーサルミュージック)



【おことわり】

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、この音楽祭は無観客開催と決定しました。この模様は11月3日(火・祝)BSテレ東において放送予定。

ソングコンテストグランプリ・2020

☆受賞に寄せて☆

玉田剛士



伝統あるソングコンテストで2曲いずれも受賞させていただけることを大変光栄に存じます。

「男の昭和挽歌」と「エレジー～終恋歌～」は詩の中に、各々に色合いの違う哀愁のある風情を感じ、読んでいだけで浮かび上がっては流れていく映像を曲にも

反映させたいと思いました。

その映像を背景に思いついたメロディーをブロックごとに何通りか書き出した後、山川 豊さんのこれまでの作品を改めて聴き直した上で、声のイメージを崩さないフレーズを選び、言葉のイントネーションができる限り自然に聞こえるよう調整しました。

今回の審査並びに制作に携わってくださった先生方、関係者の方々、そして2つのドラマを見事に描いてくださった山川 豊さんに心から感謝致します。

選考にあたって

日刊スポーツ新聞社 笹森文彦

「エレジー」と「挽歌」。辞書で「エレジー」を引くと同義語は「挽歌」と出て、逆も同じ。意味はどちらも「悲哀の情をテーマとする楽曲」とある。

対象歌手の山川 豊さんを想定し、どんなメロディーに仕上げるのか。数あるヒットの中で代表曲と言えば、やはり「アメリカ橋」。山口洋子さんと平尾昌晃さんが「肩の力を抜いた、トレンチコートが似合う歌」として制作された。そのイメージをどう払拭しているか。山川さんがエレジー（挽歌）を歌ったらどんな世界になるか、などを念頭に審査した。

残念ながら「函館本線」になっている作品も多くあった。詩の世界観と合わず「どうしてここで？」というメロディーもあった。エレジー（挽歌）と山川 豊さんをしっかり結びつけている作品を選んだが、難しかった。

産経新聞特別記者 清水 満

主役（歌手）と物語（歌詩）は決まっている。後は全体を構成するドラマ性（楽曲）。作曲者が物語の本質を理解し、主役の特性を引き出せば完成する。主役は山川 豊である。演歌の王道を歩んでいるが、「山川節、には力みがない。こぶしを抑え、独特の強さと優しさを持つ稀有な存在である。

「エレジー～終恋歌～」の主役には寡黙な男の哀愁が漂う。「男の昭和挽歌」は不器用な昭和男が見える。いずれの物語もちょっと抑えて歌唱する山川をイメージすればドラマが見えてくる。最終審査に残った楽曲はそれらをクリアしていた。いい曲でも物語と合わなければ、ドラマは完成しない。主役、物語、楽曲という「三位一体、は大事な要素である。

音楽評論家 田家秀樹

いい詩というのは言葉がメロディーを呼ぶんだ、という話を聞いたことがある。詩をじっと見ているとメロディーが浮かんでくる、というのである。今回の2曲は、そういう類の完成度を持った詩だろう。「エレジー～終恋歌～」と「男の昭和挽歌」。「エレジー」と「挽歌」。タイトルにどんな歌かが明記されている。曲を付けたくなる。腕が鳴る。

応募数が過去最多だったというのもその結果と思う。グランプリになった2曲に共通しているのは「言葉のリズム」の気持ち良さだ。「メリハリとタメ」、そして「サビの落とし込み」。こなれたというのは、こういう曲ではないだろうか。

個人的に惹かれたのが「明るく泥臭い」エントリーNo.Aの159だったことは記しておきたい。

☆レコーディングスタジオにて☆

